

図書館の本だな

～3・4年生 おすすめの本のリスト 2026～

車のいろは空のいろ ゆめでもいい



あまん きみこ 作 ポプラ社 913-ア

松井^{まつい}さんがうんてんする空^{そら}いろのタクシーは、あかちゃんをだいた黒^{くろ}い喪服^{もふく}のおかあさんをのせていました。おかあさんは、ためいきばかりついていましたが、しばらくすると、あかちゃんといっしょにねむったようです。しんごうがかわり車^{くるま}が走り^{はし}だすと、うしろからはなし声^{こえ}がきこえてきました。そして、白^{しろ}いもやのようなものが道路^{どうろ}にひろがり、松井^{まつい}さんは車^{くるま}のスピードをおとします。(『ゆめでもいい ゆめでなくてもいい』)

レイチェル・カーソン物語



なぜ鳥は、なかなくなつたの？

ステファニー・ロス・シソン 文・絵 おおつか のりこ 訳
西村書店 E-シ

レイチェルは、自然^{しぜん}を見て、その声^{こえ}をきくのがだいすきです。レイチェルには、作家^{さっか}になる夢^{ゆめ}がありました。ところが、大学^{だいがく}で顕微鏡^{けんびきょう}にひろがるちっちゃな海^{うみ}の生きものたちの世界^{せかい}に心^{こころ}をうばわれ、海洋生物学者^{かいようせいぶつがくしゃ}としてはたらきます。一方で、自然^{しぜん}があちらこちらで声^{こえ}を失^{うしな}いはじめるというおかしいことがおきていました。レイチェルは、じぶんなりのやりかたで、原因^{げんいん}を調査^{ちようさ}し、答え^{こた}をみつけます。

そいつの名前はエメラルド



竹下 文子 作 金の星社 913-タ

父^{とう}さんのかわりに、はるひこは妹^{いもうと}のたんじょう日^ひプレゼントを買いにペットショップへ行^いきましたが、店^{みせ}は休み^{やす}です。くつ屋^やのおねえさんから教えてもらった小鳥屋^{おし ことりや}には、にわとりみたいなおばあさんとねこがいました。そして、はるひこは、どういうわけかトカゲ^かを買^かって帰^{かえ}ります。ろうそく^{ろうそく}と火^ひを食^たべるふしぎなトカゲはまるで人^{ひと}のことばがわかるみたいでした。妹^{いもうと}はトカゲの名前^{なまえ}をエメラルドとつけます。

こうもり

アヤ井 アキコ 作 偕成社 Eーア



こうもりは、とりたちがねぐらへかえるゆうがたにとびはじめます。おおきさは、おとなのおやゆびくらいで、たいじゅうもとてもかるいのですが、ひとばんにたいじゅうのはんぶんくらいのむしをたべます。むしをさがすときは、ひとにはきこえないちょうおんぱをつかいます。ちょうおんぱをつかえば、くらやみでもまわりになにがあるかわかるので、よるとぶのもへいきです。こうもりたちのくらしをみてみましょう。

王さまと九人のきょうだい 中国の民話

赤羽 末吉 絵 君島 久子 訳 岩波書店 Eーア



おおむかし、ある村に子ども^このいないとしよりのふうふがすんでいました。ある日、おばあさんが、あんまりさびしいので池^{いけ}のほとりでかんがえこんでいると、なみだがこぼれて池におちます。すると池^{いけ}の中から老人^{ろうじん}があらわれ、おばあさんにひとつぶのむと子ども^こがひとりうまれる丸薬^{がんやく}を九つ^{ここの}くれました。さっそく、おばあさんはひとつぶのみますが、あかんぼうはうまれません。まちきれなくなったおばあさんがあるだけ一ぺんに丸薬^{がんやく}をのんでしま^{きゅうにん}うと、まもなく九人のあかんぼうがうまれます。

おじいさんは川へ おばあさんは山へ

森山 京 作 理論社 913ーモ



ある日、おじいさんは川^{かわ}へ、おばあさんは山^{やま}へ出かけました。川ぎしについたおじいさんはつり糸^{いと}をたらしましたが、魚^{さかな}は一匹^{いっ}きもかかりません。おじいさんは、おべんとうにはいっている大こうぶつの玉子^{たまご}やきとおむすびをひとつずつたべると、草むらにごろりとねころびました。おなじころ、山^{やま}できのこが見つからないおばあさんも、おべんとうをあけて、玉子^{たまご}やきとおむすびをひとつずつたべ、草^{くさ}の上^{うえ}へごろんとねころびます。

やねの上のカールソン

リンドグレーン 作 大塚 勇三 訳 岩波書店 949ーリ



スヴァンテソン一家^{いっか}のやね^{うえ}の上に、カールソンという空^{そら}をとぶことができるとても小さな男^{おとこ}の人が、小さな家^{いえ}でくらしていました。一家^{いっか}の七つ^{なな}の男の子^{おとこ}リッレブルールが、はじめてカールソンと顔^{かお}をあわせたのは「調子^{ちようし}のわるい」日^ひでした。おかあさんにしかられ、おとうさんに文句^{もんく}をいわれたのです。リッレブルールがじぶんの部屋^{へや}でためいきをついたとき、とつぜん窓^{まど}のそとにカールソンがゆっくりととんできて、窓^{まど}わくのすぐそばにやってきました。

コレットとわがまま王女

ルイス・スロボドキン 作 小宮 由 訳 瑞雲舎 933-ス



ポーリーン^{おうじょ}王女は、のどがいたくておちこんでいました。宮廷付き^{きゆうていづ}の医者^{いしや}は、南^{みなみ}フランスのグラスでしずかに休養^{きゅうよう}するべきだといいます。このしらせをきいたグラスの町長^{ちやうちやう}は、あたらしい法律^{ほうりつ}をつくり、町^{まち}のみんなに王女^{おうじょ}が滞在^{たいざい}しているあいだは、しずかにしてほしいとおねがいしました。町長^{ちやうちやう}のひとりむすめのコレットは、あかるくようきに料理^{りやうり}をするおかあさんがこの法律^{ほうりつ}にしたがうことはむずかしいだろうなとおもいました。

ゴロゴロヤマネコ不動産

藤重 ヒカル 作 福音館書店 913-フ



ある日^ひ、かさ職人^{しよくにん}のぼくは、ヤマネコ不動産^{ふどうさん}から「かさ屋^やにぴったりなお店^{みせ}があいています」という手紙^{てがみ}を受けとります。こっそりお店^{みせ}を見^みにいくと、ヤマネコ不動産^{ふどうさん}の猫山^{ねこやま}さんから「かさ^{みせ}とぼうしの店^{みど} くわの実堂^{みどう}」というかんばんをそのままにするという条件^{じょうけん}で格安^{かくやす}で借りることになりました。開店^{かいてん}のまえの日^ひ、ごめんくださいという子ども^この声^{こえ}が聞こえ、ガラス戸^どを開けると三毛ネコ^{みけ}の子^こが、ぼくに「ネコヌレ〜ズください」といったのです。

(『ネコヌレ〜ズ』)



イワンとふしぎなこうま

ピョートル・エルショーフ 作 浦 雅春 訳 岩波書店 981-エ

三人^{さんにん}のむすこがいるおじいさんがいました。夜^よな夜^よな小麦^{こむぎ}をあらしてまわるふとどきものがでるので、むすこたちが見^みはりをしします。三日目^{みつ かめ}に下^{した}のむすこのイワンが、見^みはっていると、ぜんしんまっしろで、こんじきいろのたてがみのメスうまが、畑^{はたけ}をあらしていたのです。イワンが、ひらりとせなかにとびのり、ふりおとそうとあばれまわったメスうまは、つかれはてました。そして、二^にとうのうまと一^{いつ}とうのこうまを生^うみましようといい、こうまは、けして手^てばなしてはいけないといいました。

「図書館の本だな」で紹介^{しょうかい}している本は

加古川市立中央図書館	☎ (425-5200)
加古川市立加古川図書館	☎ (422-3471)
たんようウェルネスパーク図書館	☎ (433-1122)
多木化学海洋文化センター図書室	☎ (436-0940)

にあります

